
聖母達の路

朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖母達の路

【Nコード】

N9146L

【作者名】

朗

【あらすじ】

ある日突然、見知らぬ異世界の砂漠に来てしまったカヨ。たくさんの人と触れ合い優しくないこの世界で彼女は生き抜いていく。そんな彼女と、彼女と出会う彼女のお話。

彼女の始り

1 .

女の目の前には、砂の海が広がっていた。周りには、植物はおろか生物の気配さえない。

何もないはただの黄色い砂の世界が広がっていた。

そんな世界にただ1人ポツンと不釣り合いな鮮やかな青を基調とした着物を纏い、女は戦っていた。自然と言う名の驚異と、孤独と言う名の自分自身と。

天からは太陽の容赦のない熱射を注がれ、それに呼応するように砂達が一に熱を蓄えそれを女に容赦なく注ぎ込んで行く。

女はただひたすらに何かを求め歩んでいた。しかし女の体力は限界の底を尽きようとしていた。だが、歩みを止める訳にはいかなかった。

女の周りには生物はおろか、岩陰ひとつとして存在していなかった。そんな状態で、射てつく太陽からも砂達からも身を守る事は出来なかった。

せめてこの熱射を遮断し休める場所、願うなら水、そして人の存在を求め女はただ1人歩んでいた。

しかし、不釣り合いな着物に草履。砂漠を歩くなど到底無理である。砂達が女の足を掴むように、邪魔をし女は何度も、何度も砂に足を取られ転んだ。だが彼女は諦めなかった。

何度も何度も転び、立ち上がった。顔の化粧は落ち、着飾った髪はほつれ体中が痛みに悲鳴をあげていた。それでも女は諦めなかった。諦める事ができなかった。

- - - 　まだ死にたくない

女はただ一心にそれを願った。

別に守りたい者が入るわけでもなかった。どうしてもやりたい事があるわけではなかった。もしかしたら全ての生命が本能のどこかにある、生への執着だったのかもしれない。

しかし何度目の転倒だろうか、女は遂に立ち上がる事が出来なかった。砂の上に転がり朦朧とする中女は前を見ていた。手を延ばしそこにあるかもしれない何かを求めた。

そして女は意識を無くした。

――ただ風達が女を嘲笑うかのように、砂に自らの軌跡をつけていった。

もとみや かよこ
元宮香世子は、裕福でも貧乏でもない日本という国の普通の中流家庭で生まれ育った。香世子が此方側にきたのは、彼女が23歳の友人の披露宴に招待された日であった。

鏡の前で彼女は成人式以来着ていない振袖を身にまとい、鏡の前に立ち20歳の時は違う自分の着物姿に満足していた。年を取る哀愁と、年を取る楽しみを肌で感じながら。

日本の女性の人生で着物を着るのは特別な習い事などをしていない限り、やはり数回のみであろう。

香世子は母親に結婚式くらいワンピースで良いと言ったら、是が非でも振袖を進められ初めはお金もかかるので難色していたが、あまりにも母親が進めるので母親の意向に添い、今回振袖を着ることになった。

（最初はお金もかかるし、疲れるし嫌だったけどやっぱりいいもんね着物って。

どうせ結婚したら着れなくなるし…あとで母さんにお礼をいっておこうかな…。）

そんな事を思いながら鏡を見つめていた時だった。なにか鏡に違

和感をおぼえた。

「なに？」

思わず呟いてしまったその時、ポツンとまるで静かな水溜りに一滴の雫が落ちたように鏡の表面が波をうった。彼女は何かに惹きつけられるように鏡に手を延ばした。

そして突然鏡の中より強い力によって引っ張られた。

「なっ！！！！や、やだ何これ！」

異変に気づき手を引き抜こうとしたが、さらに強く引っ張られどんどん鏡の中に吸い込まれていく。

鏡の中に人が吸い込まれる異常もそうだが、吸い込まれた後何が起こるか分からない恐怖に彼女は力一杯抵抗した。

「やだ！誰か！母さん！助けて！……っ！！！」

同じ家にいるであろう母親に助けを叫んだが、抵抗も空しく鏡の中に彼女は吸い込まれてしまった。

「香世子、何？大きな声で……あら？入ないじゃない。」

地に価値を見出した。

今では死の砂漠ではあるが古代栄えた古の都の遺跡が点在しており、貴重な魔道具など今では入手が困難な様々な物が多数発見されたのである。

それらを求めた人々はこの不毛な大陸にある者は冒険を、ある者は富をそれぞれ夢を見て、多くの者が移り住んだ。

砂漠には遺跡と同数とは言わないが、いくつかオアシスも点在していた。人々は砂漠の入り口と言われる町カイロックよりまずそのオアシスを目指した。そして大きな遺跡近くのオアシスは段々と人が増加し、一つの大きな町が出来上がっていった。

ここそんな町の一つであるオアシスの町デズエ。砂漠の点在する遺跡を巡る拠点にしている冒険者や、その冒険者へ必要な物を提供する商人や宿、時には冒険者よりいち早く珍しい物を買付け目的の行商人など様々な人々が行き交う賑やかな町であった。

++++

今は昼時。定食屋にとっては、一番稼ぎ時である。店内はほぼ万席状態だ。店員は慣れた手つきで客を捌いていったが、客足は止

まらず皆忙しそうに走り回っていた。

「カヨっ！そっちの皿洗いが終ったらこっちを手伝っておくれ！」

「はいっ！」

カヨは慣れた手つきで素早く目の前の皿を洗い終わると、先ほど忙しそうに声をあら上げたこの定食屋の女将のマーサの元へと走っていた。マーサはお客の注文してくる料理に追われたが、料理間に合っておりカウンターの上に多数乗っていた。どうやら最近入った新人のトイサの客への接客と、料理の運搬が間に合っていないようである。

「女将さん、この料理、運びますね」

「ああ助かるよ。あんたこっちの言葉が苦手なのに悪いね」

「いいえ、大丈夫、です。」

短い会話を終えるとカヨは料理を客の元へと運んでいった。カヨはここで働いて2年にはなるが、言葉が苦手な為、接客ではなく主にホール内での仕事を担当であった。しかし数年勤めていた接客担当の者が突然止めてしまった為、引継ぎ無しで新しいトイサに変わっ

てしまったのである。

（暫くはトイサの補助もしないとな…）

内心仕方ないと思いつつも溜息がでる毎日が続いていた。

+++++

「フー…今日も忙しかったねえ。あんた達、ここの片付けが終ったら今日はもお上がっていいよ。」

「…はいっ！」「」

「…はい」

客足が途絶えたのは、もお夕方近くになってからであつた。マーサの上がつて良いという言葉に他の店員達はあんなに忙しく、疲れしているはずなのに嬉しそうに返事をした。それもそのはずだ。今日はお祭の日。きっと思い、思いに好きなものと過ごるのである。

（私には関係ない。早く部屋に帰って休もう…）

と家に向かおうとした時、マーサに声をかけられた。

「ちょっと、カヨ！今日は祭なんだ。もっと楽しみな！」

「はい、色々見て、回ります。」

「私の若い頃には劣るけど、あんたも見た目はいい方なんだから！早くいい相手を見つけない！」

カヨはさも言葉が分からない振りをして首を傾げた。それを見たマーサは苦笑しクシャクシャとカヨの頭を撫でまわした。

「あんたはまず言葉からだね、まあ今日は楽しむんだよね？いいね？」

「…はい、大丈夫です。…お疲れ、様です」

マーサによってボサボサになった髪を整えながら、カヨは挨拶をすると家路へと向かった。

「はぁー……。大丈夫に見えないから心配なんだよね、あの子……」

そんなマーサの呟きはカヨには届いて入なかった。

本日も晴天なり。今日はこの街のはじまりを祝う日。家族と祝うもの、恋人と祝うもの、それに乗じて商いするもの、人々は互いに違いがあれど思い思いに今日という日を楽しみにしていた。

砂漠の真ん中にポツンとできたオアシスによって出来た町である。さすがに昼間に騒ぐ事が出来ないのも、夕方から深夜にかけて賑わって行つた。

かよが働く定食屋も今日は稼ぎ時であるが、マーサが「こんな日くらいは商売よりも、他にやる事があるじゃないか！」と今日は通常より早めに店しめた。従業員達は皆浮き足立った足でそれぞれの場所へ帰っていた。カヨを除いて…。

カヨは身寄りもなく、大して親しい恋人も、友人もがなかったため1人まっすぐ家路とあゆんでいた。

（はあ…マーサは、私に気を使いすぎだよ。楽しむって言われても、一緒に楽しむ相手もないし。1人でお祭にいつてもしょうがないし…マーサには悪いけど家で本を読んだほうが今の私の為なんだよね…）

（それに素直にまだ、こういう状況を楽しむ余裕が私にはないし…。私には私の今やらなくちゃ行けない事があるんだから…。）

マーサは初めてこの世界の人で信じる事が出来た人だった。そんなマーサにこれ以上気を使わせてはいけない。心配させてはいけない。そんな事は分かっている。

カヨは自分自身に余裕がなく、それをマーサが心配して生き抜きをしるという意味で伝えた事は分かっていた。分かっているのから、マーサを心配させずに余裕を持ちたいと逆に焦ってしまい、また余裕がなくなる。

そんな日々を最近はずっと続けていた。

／／／／／／／／

身寄りのない私はお金が必要で働き口を探していた。けれどガリのボロボロの私を雇ってくれる所なんてなかった。諦めかけた私はやけくそに突然働かせてほしいとマーサの店へ押しかけ土下座をした。

マーサは突然押しかけた乞食姿の私の突発的な行動に最初は呆然としていた。しかしそのあと、気に入った、雇ってやるよと言いマーサは大笑いをしたあと、お風呂に連れて行かれ、新しい服、部屋全てを整えてくれた。数日間何も食べて入らないといったら、消化の良い暖かいスープを作ってご馳走してくれた。

今思えば、お客の余った食材で、簡単につくった質素な物であつたかもしれない。それでも今でも私の中ではこの世界で食べた一番美味しい物だった。泣きながら食べる私の頭をぐしゃぐしゃにして「うまいかい？」と優しく微笑んでくれた。

私は救われたのだ。

人を疑う事も、世界を憎む事にも疲れきっていた。

（もしこの人が裏切ったら…？）

その時は優しい気持ちを持ったまま死のう。

この暖かい心もったまま、眠りにつこう。

きつと笑って死ねるから。

でも、きつとあの人には怒られてしまふかな…？

そんな思いを抱きながら久しぶりにおなか一杯に食べて、ふかふかの布団で眠りついた。

翌朝、叩き起こされた。働かざる者食うべからず。マーサは初日から容赦がなかったが私に合う仕事を選んでくれた。けれど私は本当に何も出来なかった。

じゃがいもなんて手のひらサイズが、気づいたら一口サイズになっていた。怒られると思った私をマーサは「どうやったらそんなに小さくなるんだい」、とそれをみて大笑いをした。

「慣れればいいさ。明日は二口サイズを目指そうじゃないか！でも

勿体無いからあんたが責任もって食べるんだよ。」

怒られると思った私に、マーサがそんな言葉をかけてくれた。またもや私は号泣をしてしまった。

マーサは「あんたは泣き虫だねー」と困ったように笑い、私の頭を撫でてくれた。

私は自分を恥じた。何も出来ない自分。元の世界では与えられるものを当たり前とし、それに甘えていた自分。全てを誰かのせいにしていた自分。この世界に来てから酷い事ばかりだった。全てをこの世界と、この世界に生きる人々のせいにしていた。

騙されて、たくさん殴られた。人としての扱いをされなかった。

この世界の全ての人間が怖くて、憎かった。でも元の世界にも最低な人間がたくさんいた。でも素敵な人間もいた。私は自分の中のものさしだけで、この世界を見ていたのだ。

私はこの世界も変わらず人間が存在して、最低な人間もいれば、素敵な人もいる。私が見ていたこの世界はほんの一部でしかなかった事を初めて知ったのだ。

「ワシのようになっては行けない。お前は愛しなさい。」

あの人の最後の言葉が私の頭の中に響いた。あの人は憎む事で、

この世界を生きぬいた。けれど、私もこの世界が憎かった。愛する事なんて出来やしない。そう思っていた。

愛するというのが、私にはまだ良く分からない。けれどマーサと出会い、マーサの優しさに触れる事で私の中でなにか変った気がした。

そんな風に思ったら、自然と涙が溢れた。泣く事でなにか嫌な物も流れていく気がした。

そしてマーサへ小さな声で「ありがとう」と私は呟いた。

/ / / / /

あの人に出会って無ければきっといまでも世界を憎んでいた。

あの人に出会って無ければマーサに出会えなかった。

私は恵まれていた。あの人に出会い救ってもらった。そしてマーサに出会う事ができた。

私は負けない。

こんな世界になんて負けない。

自分に負けない。

あの人の分まで生きると誓うのだから。

あの人の分まで笑って、泣いて、怒って、一生懸命生きると誓うのだから。

胸の真珠のネックレスを強く握る。

そしたらあの人のムカツク笑い声が聞こえてくる。

私は1人ではないと、感じれるんだ。

知らない世界。厳しい砂漠。

それでも私は生きて行きます。

彼女の終り（前書き）

視点がガラッと変わります。

彼女の終り

1 .

私は何の為に存在しているのだろうか？

/ / / / / / / / / / / / / / / /

様々な生命達が冬の閉ざされた世界から抜け出し、春の始まりを喜びの歌と共に告げている。手入れの行き届いた庭には色取り取りの花達が咲き誇り我先にとその美しさを主張している。中でも庭の中に立つ桜の古木はその年月からくる貫禄であろうか、見事な桃色の花びらを咲かせていた。その桜の木を、1人の小柄な着物姿の少女が目には涙を貯め眺めていた。

「お前の夫となるた元宮高貴さんだ。高貴君、娘の綾子だ。」

先刻、唐突に綾子は将来の夫の名前を知った。大事な話があると父、和利より告げられ母に着物を着せられこの家の広間へと案内された先で突然告がされた自分の将来。

江戸、明治、大正そして昭和へと時代は移り変わり日本は世界へ羽ばたいて発展していった。だが男尊女卑は拭えず、父親、夫に忠実で家を守り慎ましやかな女性が理想とされて入る時代。綾子も自分自身そのような女性になるよう努めてきた。

（なぜ今になって？…きっと私がもっと勉強をしたいと言ったからだわ！）

確かに遠くない近い将来自分も母親と同じように父のような人に嫁ぐ物と思っていた。だが綾子は知ってしまった。同じ女学校の生徒が遠くの異国の話をしてくれた。それまでの綾子の世界は、家族とその周辺のみであった。それを疑問に思った事もなかった。だが知ってしまった。自分には知らない世界を。

知ったからには止められなかった。もっと知りたい、触れたい、見てみたいと。

今までの自分を振り返り、初めて疑問に思ったのだ。父親に忠実に生きる、夫に忠実に生きる。果たしてそれは素晴らしい事なのだろうか？母は幸せなのか？今まで綾子にとって理想の女性は母であった。けれど疑問に思いたいま、とても母の人生が良いものだと感じることが出来なくなってしまった。

初めて父親に逆らい自分の考えを先日告げた。父は女に学は必要ないと思っており、私が女学校に通う事さえ快くは思っていなかったであろう。そんな父にもっと知りたいと、勉強がしたいと初めて逆らった。

その結果が強制的な婚約。

私が嫁がないのであれば妹の咲^{さき}が嫁ぐ事になる。咲は病弱でまだ12歳の子供だった。すぐに結婚する事は出来ないが、婚約者として家族と離され相手の家へと連れて行かれるのが目に見えている。自分と妹の人生どちらをとるのか？そんな事選べるわけもなかった。そして私が嫁げば嫁ぎ先の家より援助してもらい、咲の治療金や傾いている家の事業も元に戻るのだ。結局私は父に逆らえなかった。

自由な友人、病弱で皆に可愛がられ愛される妹。決して咲のことが嫌いではなかった。むしろ可愛い大切な妹だ。けれど父や母の妹を哀れみ、慈しむ目。私にむける目とは違う。

少ないが親しい友人のいる妹、愛らしく皆に可愛がられる妹、我儉を言っても怒られない妹。

私も病弱だったらもつと父や母は可愛がってくれたのだろうか？そんな事を考えてはいけない。咲は私と違い部屋に籠りがちで、自由に外で遊ぶ事さえできない。咲には咲の辛さがあるのだから。

けれど悔しかった。何に対してであろう？分からない。

無償に独り泣きたくなった。

カサッ

その時奥の庭より人の気配がした。

「泣いていらつしやるのですか？」

現れたのは先刻父より紹介のあつた未来の夫である青年であつた。痩せ型で真面目で優しくそんな青年である。

「っ……！い、いえちよつと目にゴミが入つたもので。」

私は慌てていかにも取り繕つた嘘で誤魔化した。この婚約を破談にさせてはいけない。この青年に不快な思いをさせ、破談とされて困るのは私だ。

そんな姿の私を見た青年は苦笑しながら、私のいる桜の木の下まで歩みより「これを」と小さく呟きハンカチを手渡してくれた。

「あ、ありがとうございます。」

私は狼狽しながらもお礼を言い、そのハンカチを受け取つた。

お互い何を話して良いか分からず、桜の下で沈黙が続いた。沈黙を破つたのは、青年だった。

「見事な桜ですね。」

「…そう、ですね。とても綺麗です」

「風に舞う花びらはまるで桜の木が流す涙のようですね。」

「…っ。そんなことは！」

青年のその一言は私を焦らした。こんな誰も来ないような桜の木の下で泣くほど自分との婚約が嫌なのかとそう言われた気がしたのだ。そんな私を見た青年は、苦笑しながら話を続けた。

「誤解為さないで下さい。私は貴方を責めてる分けではありません。突然の婚約です。貴方が戸惑うのは無理も無いお話です。」

「…この婚約のお話は私から貴方のお父様に直接願いでたのです。」

「…え？」

「一目惚れといって信じて頂けるかどうか分かりませんが、私は貴方の事を忘れる事が出来なかった。むしろ私が貴方の自由を奪ったと責められるべき立場なのですよ。」

青年の突然の告白に私は頭の中が真っ白になった。

この人は何を言ってるのだろう？一目ぼれ？この人が私に？ありえない。

私の一日は家で始まり家で終る。日中も女学校に通っているのも男性と会うなどめったにない。そんな中で男性に会っているのであればそれなりに私も顔を記憶するであろう。

だが私は彼と会ったのはこれが初めてであった。

「信じては頂けないとおもっております。だがこの気持ちは決して嘘偽りの無い物です。それだけは信じて頂きたい。」

「そんな事を言われても、私と貴方が会うのは今日が初めてのはずです！」

私は馬鹿にされてるのかと思い怒気を含めた声で言い放った。

しかしそのあと直にこの婚約を破談にさせてはいけないもので、自分の失言に気がついた。普通ならばここは頬を染めてまあとか呟けば良かったのであろう。

けれど全てに対し怒り自分を情けなく泣いていた後だ。

私は冷静になることは難しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9146/>

聖母達の路

2011年1月20日04時17分発行